

現代日本語の副詞「まるで」について

深見兼孝

On the Modern Japanese Adverb ‘marude’

Hukami Kanetaka

Based on an analysis of 277 examples from 18 Japanese novels, I explored the relationship between the sentential positions and meanings of the Japanese adverb ‘marude’. Depending on the phrases which appear between ‘marude’ and its related phrase, it can be categorized into three distinct uses: 1) in similes, 2) in non-similes with formally negative predicates, and 3) in other non-simile sentences. Although these categories do not align perfectly with the meaning of ‘marude’, this study may provide a new perspective on its examination.

Key words: *simile marker, phrase, formally negative predicate, semantically negative predicate*

キーワード：直喩標識、文節、否定形式の述語、否定的意味を持つ述語

1 はじめに

本稿は現代日本語の「まるで」の文中に現れる位置と文の意味の関連を探ろうとしたものである。

2 先行研究と問題点

「まるで」は、「すべての観点から見てそう言って差し支えない様子」（『新明解国語辞典』2006）、「そっくり全部がある状態を呈する様をいう」（森田 1989：426）などとされるが、大きな分類として、直喩標識¹⁾とともに用いられる場合とそうでない場合に分ける（森田 1989:426－427）か、否定的な内容が続くかそうでないかで分ける（『Goo辞書』²⁾）かの見解の相違がある。また、「まるで」と類義語との意味用法の違いを探る試み（朴 2016, 朴 2021）もなされ、作家個人の「まるで」の使い方を探ろうとする試みもある（山口 2021）。

しかし、「まるで」が現れる位置という観点からの研究は見当たらない。例えば、「まるで」が否定の述語と共起するときは、「まるで」と否定形におかれた述語の間には他の要素が来ることはあまりなく、一方、直喩標識と共起するときは、「まるで」と直喩標識の直前の要素の間にはそれが体言類であっても様々な要素が置かれうるように思える。すなわち、「まるで」の位置とその意味にはある程度の相関関係があると推測されるのである。

3 方法

現在から遡って大雑把に半世紀となる 1970 年代以降の文学作品³⁾から「まるで」を

含む文を取り上げて分析した。対象とした文学作品は小説で 18 冊である。たまたま筆者が所有しているものから無作為に選んだので、分量的に均一ではないが、同一作家の作品はない。「まるで」の用例は全部で 382 例であった⁴⁾。

「まるで」が関係する要素は、大別して、直喩標識である「よう(だ)」、「みたい(だ)」とそれ以外に分けられる⁵⁾。直喩標識以外の「まるで」と関係する要素は、否定形式の述語、意味的に否定的な述語、それ以外の述語に分けることができよう。一方、直喩標識は体言類に結合するときと用言類に結合するときに分けられるが、体言類に結合するときだけを取り上げる。用言類に結合するときは節を形成するので、おのずと「まるで」との間に現れる文節の数は多くなるからである。直喩標識はそれぞれ、終止形(ようだ、みたいだ)、連体形(ような、みたいな)、および連用形(ように、みたいに)を取る。また、「よう(だ)」に助詞「か」と「の」が介在して形成された「かのよう(だ)」を別途立てることができる。しかし、「かのよう(だ)」は体言類に結合するときは「の」ではなく「である」を介在させるので、やはり節を形成すると見なして、「かのよう(だ)」は取り上げないことにする。この結果、382 例中の 227 例を扱うこととした。

この 227 例について、直喩標識がない場合とある場合に分け、前者は「まるで」と述語の間に介在している文節、後者は「まるで」と直喩標識と直前の体言類の間に介在している文節を調べた。その文節数は「まるで」とそれが関連している要素(体言類)の距離を示すものと考えた。

4 直喩標識がない場合

まず、直喩標識がない場合、「まるで」と述語の間に置かれる要素について見てみる。

4-1 述語が否定形式

この例は 22 例だった。具体的には以下の通りである。

- (1) 大丈夫じゃない、物騒じゃあない(か)、喜劇俳優か仮想宴会の出席者ではない(か)、荒野ではない(か)、国賓じゃない(か)、子供じゃない(か)、風景ではない(か)、合わない、思い出せない、及ばぬ、介さず、考えない、しない、知らない、つかない、理解できない、ならない、見られない、わからない：「つかない」、「理解できない」、「わからない」が 2 例ずつで、他は 1 例ずつだった。

これらのうち、「まるで」と否定形の述語の間には 16 例で何も現れず、6 例で他の文節が現れていた。具体的には、「子供じゃない(か)」は「臆病な小さな」が、「風景ではない(か)」は「この世の終わりの」⁶⁾が、「介さず」は「意に」が、「しない」は「気に」が、「つかない」は 2 例とも「見当が」が「まるで」との間に現れていた。す

なわち、この6例中4例は1文節、2例は2文節が現れるという結果だった。この2例は体言類の述語で2文節はその連体修飾成分だった。「喜劇俳優か仮想宴会の出席者」は「仮想宴会の出席者」が「喜劇俳優」と等価であり、両者は並列されているので全体で1文節とみなした。また、「意に」、「気に」、「見当が」は述語に対して補語成分になっている。さらに、「意に介さず」、「気にしない」、「見当がつかない」は2文節であってもひとまとまりと認識されやすく、その外側に「まるで」が現れることは自然であろう。

意味的に見ると、ここの「まるで」は「完全に」の意味である。否定疑問となっている体言類の述語の場合も、断定の強調と考えていいだろう。

4-2 否定的な意味を持つ述語

この例は36例だった。具体的には以下の通りである。

- (2) ない、意味不明、無抵抗、違う、逆転している、欠如している、腑抜けている、間違っている、向いている、無視する：「ない」が12例、「違う」が16例、他は1例ずつだった。

ここで、「向いている」に関し「向く」自体は意味的には中立的だが「そっぽを」取ること、全体として否定的意味を帯びるのでここに入れている。

さて、これらのうち「まるで」と述語の間には26例は何も現れず、10例は他の文節が現れていた。具体的には「ない」には「その自覚が」、「表情が」、「品というものが」、「覚えが」、「手応えが」が、「違う」には「質が」、「性質が」、「様式が」が、「まるで」との間に現れる例があった。「逆転している」は「立場が」が、「向いている」は「そっぽを」が「まるで」との間に現れていた。これらは述語に対し補語成分となっている。うち8例が1文節、2例が2文節と3文節という結果だった。意味的にはここの「まるで」も「完全に」の意味である。

ここで「その自覚」の「その」は連体詞で後ろに必ず名詞を要求するという点で「その自覚が」は一つのまとまりとしての結合が強いと言える。また、「品というものが」は3文節だが、ひとまとまりとしての結合が強いだろう。同じく「そっぽを向く」もひとまとまりとして結合が強い。

なお、「逆転している」、「欠如している」、「腑抜けている」、「間違っている」、「向いている」が状態を表しており、否定的な意味を持つ述語は状態を表す傾向があると言える⁷⁾。

4-3 その他の述語

これは21例だった。大きく体現類と用言類分けると、体言類は19例で、用言類は2例だった。具体的には以下の通りである。

(3) 体言類

SF、脅し、こども、少年、彫像、泥棒呼ばわり、畑違い、場違い、独り合点、別人、昔話、迷路、モーゼ、森、幼児教育、おいぼれ、交換遠足、扱い、フリッカー

(4) 用言類

そっくり、同じ

体言類では 19 例のうち 15 例で「まるで」と述語の間には何も現れず、4 例で他の文節が現れていた。うち 3 例、すなわち、「おいぼれ」では「まったくの」が、「交換遠足」では「大学の」が、「扱い」では「虎狼の」が「まるで」との間に現れていた。「フリッカー」では「古い映画のフィルムの」が「まるで」の間に現れていた。すなわち、4 例のうち、3 例は 1 文節、1 例は 3 文節が現れていた。いずれも、連体修飾成分である。その連体修飾成分は体言か形容詞または形容動詞が主要成分になっていて、動詞は現れていない。

用言類では、「そっくり」は「お義姉さん」、「同じ」は「ハイキングも」という述語の 1 文節の補語のみが「まるで」との間に現れている。すなわち、2 例とも述語との間に 1 文節の補語が現れていた。

さて、「その他の述語」に属すものは、体言類でも用言類でも事実ではないと見なされている。体言類、用言類から 1 例ずつ挙げる。

- (5) 中禅寺敦子は 그레이 の千鳥格子のハンチングを被り、同じ柄のズボンを革のズボン吊りで吊っていて、まるで少年である。(姑獲鳥)
- (6) だが共和国の冬の行軍訓練に比べるとまるでハイキングも同じだった。(半島を)

(5) では「中禅寺敦子」は「少年」ではないと知っていながら、「少年」といってもいいくらい少年らしいと言い、(6) では決して「ハイキング」をしているとは思っていないにもかかわらず、「ハイキング」といってもいい（くらい簡単だった）と言っているのである。

4-4 特殊例

次の 2 例では、「まるで」は「錯覚させる」と「なる」を修飾している。すなわち、「まったく（すっかり）錯覚させる」や「まったく（すっかり）なる」と解釈でき、「まったく」の基本的意味が現れていると言える。しかし、同時に節で現れている内容、すなわち「中井の死体が起き上がった（かと）」と「水戸藩を裏切った（ことに）」も、「事実はそうではないが、まったくそのように見える」という解釈ができ、「まるで」の意味に沿ったものである。後者の解釈を取る場合、述語「錯覚させる」や「なる」は直喩標識に接近する。

- (7) が、のめる瞬間、中井の背後から重なるようにして、まるで中井の死体が起きあがったかと錯覚させるようなすばやさで、おなじ抜き打ちが斎藤を襲った。(幕末)

- (8) 藩邸にもどってから、治左衛門が、「兄上、数日後に水戸有志代表の木村権之衛門殿が来られる
というのに、この為体(ため)ではわが藩はまるで水戸を裏切ったことになるではありませんか」
(幕末)

4-5 直喩標識がない場合のまとめ

各の場合についてまとめると以下のようなになるだろう。

- 1) 述語が否定形式：22 例中 16 例で「まるで」と否定形の述語の間には何も現れておらず、残る 4 例は 1 文節、2 例は 2 文節が現れるという結果だった。この 4 例は述語の補語成分が「まるで」との間に現れていた。後者の 2 例は体言類の述語で 2 文節は連体修飾成分だった。「まるで」は「完全に」という意味である。
- 2) 述語が否定的な意味を持つ：36 例中 26 例で「まるで」と述語の間には何も現れず、現れる 10 例でもそのうち 8 例が 1 文節、2 例が 2 文節と 3 文節という結果だった。意味的にはここの「まるで」も「完全に」の意味である。
- 3) その他の述語：体言類では、19 例のうち 15 例では「まるで」と述語の間には何も現れず、3 例は 1 文節、1 例は 3 文節であった。いずれも、連体修飾成分である。その連体修飾成分は体言か形容詞または形容動詞が主要成分になっていて、動詞は現れていない。用言類は 2 例であったが、どちらも述語の 1 文節の補語が現れていた。「その他の述語」に属すものは、体言類でも用言類でも事実ではないと見なされている。

以上、「その他一用言類」を除いて、「まるで」と述語が直接結合する場合が過半数を占め、「その他一用言類」はその例がなかった。ただし、1 文節が介在する場合を含めると、どれも過半数となる。また、「まるで」と述語の間に、「否定形式」では 2 文節まで、「否定的意味」と「その他一用言類」では 3 文節まで現れている。そこで、大きく「否定形式」とそれ以外に分けることができる。意味的には「否定形式」と「否定的意味」が一グループを形成しているので、介在文節から見たこの区分と平行しているわけではない。「否定形式」では「まるで」との間に現れるものとして、体言類なら連体修飾成分、用言類ならその補語であった。「否定的意味」、「その他一用言類」のいずれにおいても「まるで」との間に介在するのは述語の補語、「その他一用言類」では「まるで」との間に現れるのは連体修飾成分で、そこには動詞はなかった。なお、特殊例として、述語動詞が節をとって直喩標識に接近する場合もあった。

5 「みたい(だ)」と「よう(だ)」

「みたい(だ)」と「よう(だ)」の直前の要素(体言類)と「まるで」の間に介在している文節数(表の最上段)ごとに例数を示すと以下の通りである⁸⁾。

表 「まるで」と直喩標識直前の体言類の間の文節数

	0	1	2	3	4 以上	計
みたいだ	7	1	-	1	1	10
みたいな	-	-	-	3	-	3
みたいに	4	6	-	-	2	12
小計	11	7	-	4	3	25
ようだ	11	9	3	1	1	25
ようで	-	2	-	-	-	2
ような	12	5	5	3	2	27
ように	37	10	9	9	4	69
小計	60	26	17	13	7	123
計	71	33	17	17	10	148

直喩標識によって、またその形によって出入りはあるものの、総じて言えば、直喩標識直前の要素（体言類）と「まるで」の間に現れる介在文節がない例（「みたい（だ）」が 25 例中 11 例、「よう（だ）」が 123 例中 60 例）が過半数を超えていない。この点が直喩標識のない場合と異なる（ただし、介在文節が 1 つの例も入れると、直喩標識が存在しない場合と同じように過半数を超える）。また、4 つ以上の介在文節が現れることがあるという点でも、直喩標識が存在しない場合と異なっている。一番多いのは「ような」に 9 文節の例があった。また、直喩標識直前の要素（体言類）と「まるで」の間に現れる要素が 2 文節以上からなっている場合、それが体言類だけでできているのは「ような」に 2 文節の例が 1 例あるだけであった。他はその中に動詞による文節が現れ、その補語とともに節の形を取ることもしない。これも直喩標識のない「その他の述語、体言類」（2-3）と異なっている。

以下は体言類だけでできている 2 文節の介在要素の例である。

- (9) あの朝鮮語が達者だった西日本新聞の年輩の記者は、まるで田舎の郵便局の事務員のような風貌だったが、逮捕状の根拠となる法律というもっとも触れて欲しくないことを聞いてきた。（半島を）

以下、直喩標識の終止、連体、連用それぞれの形で一番多くの介在文節が現れている例を介在文節の数（〔 〕内）とともに挙げる（4 文節以上に限る）⁹⁾。「みたいに」については最大が 4 文節だが 2 例あったので、どちらも例示しておく。

- (10) みたいだ：まゆみに言う声は、なんだがまるで二人で仕掛けたいたずらを見つかって、ぺろりと舌を出す子どもみたいだった。（卒業） [7]
- (11) みたいに：子どもたちの身体 はまるで、太陽の熱で柔らかくなったゴムみたいにくんにやりと

- していました。(カフカ) [4]
- (12) みたいに：何度でも何度でも、まるで夜明け前に死神と踊る不吉なダンスみたいに、それが繰り返えされる。(カフカ) [4]
- (13) ようだ：まるで、集中砲火を掻い潜って湿地帯を逃げ惑った、あの日のようだ。(姑獲鳥) [4]
- (14) ような：彼はまるで、世界のどこかに必ずあるという、一枚のカードを求め、旅する冒険家のような気分になっていた。(博士) [9]
- (15) ように：まるで、おんぶしていた祐介を、「ね、ちょっとお願い」と移して寄越すときのように。(理由) [7]

6 まとめと今後の課題

介在文節という観点から、「まるで」について考察した。その結果、「まるで」は直喩標識がある場合とない場合で大きく分かれ、ない場合は述語が「否定形式」かそうでないかに分かれる。これは「まるで」の意味に平行してはいないが、新たな観点とできるのではないかと思う。本稿では直喩標識がある場合で、「まるで」がある場合とない場合の比較をしていない。「まるで」の理解にはこの考察も欠かせない。今後の課題としたい。

注

- 1) 「直喩であることを明示する標識」という意味で使った。比喩であるためには事実はそうでないというのが前提となる。「よう（だ）」は「不確かな断定」や「婉曲」の用法を持つ（森田 1980：503－509 特に 505-506）が、「まるで」があるとその用法はなくなるだろう。例えば、「雨が降ってきたようだ」は、はっきり「雨が降ってきた」と断定できない場合（不確かな断定）や「雨が降ってきた」ことを遠慮がちに言う（婉曲）ときに用いることができるが、「まるで雨が降ってきたようだ」は、実のところ雨は降っていないと知りつつ、例えば雨音にそっくりな音が聞こえてきたときに用いるであろう。
- 2) この辞書では否定的な内容が続かない場合を「比喩や類似の表現として。まったく。すっかり。あたかも。さながら。」とし、さらに次のように分類している：
 - 1 助動詞「ようだ」「ごとし」「みたいだ」などを伴った比喩表現の句を後ににつづけて。
 - 2 似ていることを表す用言に続けて。
 - 3 （断定表現を後に続けて）とても似ているさま。
- 3) 「まるで」の現れ方はジャンルによる違いがあるかもしれない、ジャンルは限定した方がよいと考えた。一方で、文学作品は比較的多様な表現を採集できると考えた。また、1970 年代以降の作品なら、歴史の変遷を考慮しなくてもいいだろうと考えた。
- 4) 正確に言うと 384 例だが、このうち 1 例は登場人物の発話で「まるで」以下が表出されていない。また、もう 1 例も登場人物の発話だが、「まるで」は対話者の発話の繰り返しで、文中に対応する要素がない。よって、この 2 例を除いた 382 例を対象とする。
- 5) 「先行研究と問題点」で述べたように、別の分類の仕方もある。手始めとしてこのように分類した。また、直喩標識はこれ以外に「ごと（し）」「そう（だ）」「ふう（だ）」が現れていた。これらは、例が少なかったので、用例としてカウントしただけで実際には分析の対象としていない。また、これらには連体形と連用形の例はあったが、終止形の例はなかった。なお、「ごと（し）」の連用形「ごとく」の他に「ごとくに」の例もあった。

- 6) 「この世」は一語化しているとみなし、「この世の・終わりの」と2文節とした。
- 7) 朴(2021)は動詞のアスペクト形式を考慮していないが、「非比況用法でも、「まるで」は典型的な動作を表す動詞との共起がなくなってきたおり、状態性の動詞や述語との共起に限定されてきている。」(朴2021:23)としており、同じ方向を向いているだろう。
- 8) 文節の数え方は第2節での数え方に準じるが、形式名詞「こと」もその1文節の修飾語と合わせて一つとした。
- 9) 「みたいな」と「ように」は4文節以上が介在する例がなかった。

対象とした小説は以下の通りである。出版年は文庫本の場合、括弧で単行本の出版年も示した。例文を引用する場合、原典は『』内の略語を使った：

- 1) 『姑獲鳥』：京極夏彦『姑獲鳥の夏』講談社文庫、講談社、1998年(1994年)
- 2) 『陰陽師』：夢枕獏『陰陽師飛天ノ巻』文春文庫、文藝春秋、1998年(1995年)
- 3) 『火天』：山本兼一『火天の城』文春文庫、文藝春秋、2007年(2004年)
- 4) 『カフカ』：村上春樹『海辺のカフカ(上)』新潮文庫、新潮社、2005年(2002年)
- 5) 『キッチン』：吉本ばなな『キッチン』角川文庫、角川書店、1998年(福武書店1988年)
- 6) 『三匹』：有川弘『三匹のおっさん』文春文庫、文藝春秋、2012年(2009年)
- 7) 『しゃばけ』：畠中恵『しゃばけ』新潮文庫、新潮社、2004年(2001年)
- 8) 『世界』：片山恭一『世界の中心で愛を叫ぶ』小学館、2001年
- 9) 『卒業』：重松清『卒業』新潮文庫、新潮社、2006年(2004年)
- 10) 『唯野』：筒井康隆『文学部唯野教授』岩波書店、1990年
- 11) 『トット』：黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』講談社文庫、講談社、1984年(1981年)
- 12) 『西の魔女』：梨本香歩『西の魔女が死んだ』新潮文庫、新潮社、2001年(楡出版1994年)
- 13) 『博士』：小川洋子『博士の愛した数式』新潮文庫、新潮社、2005年(2003年)
- 14) 『幕末』：司馬遼太郎『幕末』文春文庫、文藝春秋、2001年(1977年)
- 15) 『半落ち』：横山秀夫『半落ち』講談社文庫、講談社、2005年(2002年)
- 16) 『半島を』：村上龍『半島を出よ(上)』幻冬舎文庫、幻冬舎、2007年(2005年)
- 17) 『理由』：宮部みゆき『理由』新潮文庫、新潮社、2004年(朝日新聞社1998年)
- 18) 『64』：横山秀夫『64(ロクヨン)上』文春文庫、文藝春秋、2015年(2012年)

参考文献・辞書

- 森田良行(1989)『基礎日本語』1 角川小辞典7 角川書店
 森田良行(1980)『基礎日本語』2 角川小辞典8 角川書店
 朴秀娟(2016)完全否定を表す副詞「まるで」「ぜんぜん」「まったく」に関する一考察『神戸大学留学生センター紀要』22, p.41-57 (<https://doi.org/10.24546/81009478>)
 朴秀娟(2021)副詞「まるで」が共起する述語について 『現代日本語研究』13, p.12-26 (<https://doi.org/10.18910/88319>)
 山口豊(2021)宮沢賢治童話における「まるで」の用法『武庫川女子大学学校教育センター紀要』第6号, p.26-37 (<https://mukogawa.repo.nii.ac.jp>)
 『Goo辞書』<https://dictionary.goo.ne.jp/word/丸で>
 『新明解国語辞典』(2006)三省堂
 『Weblio辞書』<https://www.weblio.jp/content/丸で>